

## 農林水産大臣賞

### 【 美佐野地区 】

代 表 者：桑 下 利 一

所 在 地：岐阜県可児郡御嵩町美佐野

#### 1 地域の沿革と概要

御嵩町は岐阜県の東南部に位置する周囲を山林に囲まれた中山間地帯にある町である。

この町は古くは中山道の宿場町として栄え、明治になると可児郡役所・裁判所等の公共施設も置かれるなど、古くから東濃地方の政治・経済・文化の中心として繁栄してきた。

特に、満州事変から太平洋戦争にかけての戦時中は、石炭の代用品として亜炭（炭化の低い石炭）の採掘が盛んに行われ、最盛期に炭鉱で亜炭の採掘に従事する者は3,500人にのぼるなど、亜炭の採掘は御嵩地域の地域経済を支える重要な基幹産業となっていた。

しかしながら、昭和30年代半ばになると、石炭から石油へのエネルギーの転換が急速に進んだことから、亜炭の採掘量も激減し、昭和43年には御嵩町の亜炭の歴史は幕を閉じることとなった。

その後、国内の高速道路網の整備が進み、この地域の付近にも中央自動車道土岐IC、東海環状自動車道可児ICが設置され、中京圏からのアクセスも比較的恵まれた立地環境にあることから、近年では名古屋、岐阜のベッドタウンとして宅地化が進むとともに、工業団地も活況を呈している。

美佐野地区は、御嵩町の東南部に位置する三方を山に囲まれた農家主体の戸数67戸の集落であり、地区の中心には可児川が流れ、可児川沿いに水田が広がる農業地域である。

また、この地区は河川改修が行われるまで、度々可児川の氾濫により水害に悩まされてきた地域でもある。



## 2 むらづくりの動機、背景

### ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

御嵩町では亜炭の閉山以降、地域経済は衰退するとともに、地域のコミュニティも次第に弱体化しつつあった。

町では亜炭に代わる地域産業振興対策として、積極的な企業誘致を進めたことから、工業化・都市化はある程度進んだものの、農業振興については必ずしも積極的な取組は行われていなかった。

また、御嵩町の地下にはかつて地域経済を支えてきた亜炭の坑道が縦横に走っており、町では陥没事故を防ぐ観点から、公害復旧事業により坑道の充填工事（埋め戻し）が優先的に行われたことも、地上の基盤整備事業を遅らせた大きな要因である。

遅れていた基盤整備事業も昭和60年にようやく着手され、美佐野地区の農地の基盤整備事業は平成7年に完了した。基盤整備事業完了当時、美佐野地区には自治会は存在していたものの、地域コミュニティは弱体化しており、念願の基盤整備事業が完了して営農環境が整ったにも関わらず、農業振興体制は整っていない状態であった。

そこで、美佐野自治会では、今後の美佐野の農業や自然環境をどのように守り、後世に継承していくかが話題となり、地区の36戸の農家が集まり検討を重ねた結果、平成9年に農協OBを中心とした「美佐野機械化営農組合」を立ち上げ、組織的な農業を展開していくこととなった。



また、営農組合の組合員の過半は60歳以上の企業や農協の退職者で構成されているが、加入の動機としては、退職後

の生き甲斐づくりという観点から、地域の環境保全や水稻の基幹作業、転作田の管理を担っている者も多い。

### イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

昔から美佐野の農業は水稻中心の農業であったが、基盤整備事業が完了したことにより生産効率が格段に向上していること、機械化営農組合設立により農作業に要する労力も以前に比べ大幅に軽減されたことから、組合ではこれを契機に美佐野の農業を特徴ある農業へ転換してもいいのではないかとの意識が芽生え始め、農業普及センターの指導も仰ぎつつ、今後の美佐野の農業の方向について検

討が開始された。

そして、組合員の総意として得られた答えは、基盤整備の完了と同時に始まった大豆づくりを基本とすることであった。

しかしながら、どこの地域でもやっている大豆を、いかに美佐野の特色を出しつつ、売れる大豆にするかが大きな課題であった。

機械化営農組合では、普及センターと連携して大豆のニーズを調査した結果、高タンパクで味には定評があったが、生育段階での「皮切れ」や「紫斑病」に弱いことから生産者に敬遠され、今では奨励品種からも消えた「中鉄砲」であれば高値でも地元の加工業者が買い入れる意向を持っていることが判明。

しかしながら、病気に弱い「中鉄砲」を農薬や化学肥料を減らして栽培することが高値で引き取る条件であった。

需用者ニーズを踏まえた大豆づくりは、従来大豆づくりに比べ、管理には手間を要することとなったが、高値でも売れる大豆づくりは、それまでの需用者も分からず、作れば農協が買ってくれるという生産者の意識を大きく変えることとなり、「中鉄砲」への取組は、美佐野地区の農業の方向を大きく変えるとともに、組合員の気持ちを一つにまとめることとなった。

なお、美佐野の「中鉄砲」を原料とした豆腐が、地域の伝統的な陶器である「織部」の名を冠して、「織部庵」というネーミングで「ざる豆腐」の形態で高値で販売され、消費者からも「美味しい」と評価されていることは、組合員の大きな励みともなっている。



#### ウ 現在に至るまでの経過

平成9年に地区の農家36戸で立ち上げた「美佐野機械化営農組合」設立は、それまでの個々の農地で何をするかという考えから、地域農業をどうすべきかという視点に立って地域農業を考えるきっかけとなった。

また、平成11年から始まった「中鉄砲」づくりについては、それまでの生産者側の判断による大豆づくりから、需用者側の判断による品種、栽培方法へと180度転換することとなった。

「ぎふクリーン農業」(低農薬、低化学肥料)による「中鉄砲」づくりは、消費者の安全・安心志向の高まりや、高級志向を背景とした実需者側(豆腐加工業)のニーズに応じたものであり、このニーズへ対応するためには、美佐野機械化営農組合だけの努力ではなかなか難しく、農業改良普及センターとの連携によりはじめて実現したものである。

また、美佐野の大豆づくりの取組は消費者にも評価され、生協組合員を会員と

する大豆のオーナー制度「豆っこクラブ」結成へと発展し、都市住民との交流のきっかけともなった。

さらに、美佐野地区の大豆は、御嵩町の生活改善グループでの手作り味噌の加工や地元の小学校での豆腐づくり体験学習にも取り入れられ、「地産地消」を地域に浸透させる重要な役割も果たしている。

### 3 むらづくりの推進体制

#### ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

美佐野地区では、58戸の農家と9戸の非農家で自治会を組織している。この美佐野自治会の中核となっているのは36戸で組織する美佐野機械化営農組合であるが、その他の活動グループとしては、40歳以下の男性で集落の祭りや盆踊りなどの行事を担う『美友会』、40歳を過ぎると『五六会』そして、60代になると『延命会』で集落のお宮や弘法堂の管理活動にいそしんでいる。

女性は『婦人部』を組織し、行事の裏方や役員のサポート役として自治会の縁の下で支えている外、料理の研究などを行っている。

#### イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体との関係

現在、美佐野地区の中核となっている美佐野機械化営農組合では、「中鉄砲」づくりを通じて、食品産業事業者（大豆加工業者）、都市住民（生協）との関係が深まっているが、大豆加工業者や消費者とこの地域を結びつけた立て役者は農業改良普及センターであった。

農業改良普及センターでは、遅れていた美佐野の基盤整備事業完了を契機として始まった美佐野地区の大豆づくりを支援する観点から、需用者の開拓に尽力したばかりでなく、需用者のニーズも生産者に的確に伝えるとともに、ニーズに応える「ぎふクリーン農業」による大豆栽培の指導等、現在の美佐野地区の大豆づくりの基礎を築く上で大きな役割を果たしている。また、生産者に「売れる大豆づくり」という認識を植え付け、生産者の意識まで変え、また地域もその指導に応えた結果を出したことから、両者の信頼関係は現在でも強固なものになっている。

また、その取組を評価して「豆っこクラブ」を組織し、農村との交流を図っている生協、子供たちに生産（農業体験）から消費（学校給食での豆、味噌）まで教育として体験させている地元上之郷小学校等、大豆を通じた交流の輪は広がり、そ





これは美佐野地区の大豆生産者の励みともなっている。

環境にやさしい農業を評価しているのは業者や消費者ばかりでなく、地域の環境保全の重要性は地区内の企業N社も共通の認識を持っており、N社は町と「環境の保全と創造に関する協定」を締結し、

地元美佐野地区と一体となつての水環境や景観の保全に取り組んでいる。

また、町の支援の下、町内の生活改善グループも美佐野地区の大豆を使用した手作り味噌づくりも始まり、美佐野の取り組みは、町全体への広がりを見せている。

#### 4 むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

##### ア 農林漁業における生産面、流通面の取組み状況

御嵩町には、これまでも作業請負をする営農組合はあったが、集落の農地利用調整まで行う組織の設立「美佐野機械化営農組合」が初めてであり、現在でも唯一の組織である。

組合では、美佐野地区の生産調整を組合員合意の下に効率的に行っているとともに、基盤整備と機械化体系のメリットを最大限に活かした効率的な農業が行われており、このことは他の地域の模範ともなっている。

また、大豆は品種、栽培方法等、需用者との話し合いにより、ニーズに応じた大豆を供給することによって高値で取引されている。

##### イ 認定農業者や集落営農等担い手の状況

現在、美佐野地区には認定農業者はいないものの、美佐野機械化営農組合では毎年定年退職者を中心に、次期オペレーターの養成を行い、機械作業の担い手は順次確保している。

##### ウ 新規就農の状況や女性、高齢者、NPO、企業等の参画状況

美佐野地区では地区内にあるN社に勤める者も少なくないが、N社を退職した者のほとんどは退職後に就農している。また、女性や高齢者は、赤かぶ、じねんじょ、なす等、季節の野菜作りを行っている者が多く、野菜は集落から3kmほど離れた道の駅「志野・織部」に毎週土日



に出店し、対面販売を行っている。

#### エ 農地の利用集積、耕作放棄地の解消等の状況

機械化営農組合では、地区の水田（水稻、大豆）全体の7割以上を管理しており、基盤整備で整理された農地は、可児川を挟んで南側が水稻、北側が大豆と団地化されており、効率的な利用集積が行われている。

なお、美佐野地区内に耕作放棄地はない。

#### オ 加工・販売等の経営の多角化、環境保全型農業への取組、食品産業との連携等の状況

環境保全型農業への取組は、大豆については平成12年から農薬使用量を30%削減した「ぎふクリーン農業」が実践されているが、現在は平成19年度から本格実施される「農地・水・環境保全向上対策」を見据え、組合の試験圃場において、水稻についても農薬、肥料を50%削減した試験栽培を行っているところである。

また、食品産業との連携状況については、地元の大豆加工業者との間において、品種、栽培方法等を話し合った上で、ニーズに応じた大豆を供給しているところである。

何れにしても、美佐野地区では、地区内の企業も一体となり、地域全体で環境に配慮した地域づくりが進められている。

#### カ その他地域農林漁業の持続的発展のための取組（経営の改善）等について記述

この地区周辺には、集落単位での機械化体系の整った組織はなく、組織的な機械化営農を目指した美佐野機械化営農組合の取り組みは新鮮で、特に、平成13年に大豆専用コンバインを導入したことは、地域にとっても画期的なことであった。



### 5 むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

#### ア 生活・環境整備面の取組状況（生活環境施設の整備、安定的な就業機会の確保、生活条件の改善、定住の促進など）

美佐野地区の中央には、可児川と国道21号線が通っているが、可児川法面の清掃活動や、国道沿いの花壇等の環境美化活動については、地区住民と地元企業

が協働して行っている。

また、昭和39年に美佐野地区に移転してきたN社では、移転当初から地元からの雇用を図り、現在でも8名がN社で雇用されている。

なお、既にN社を退職し、現在は美佐野で農業をしている者も14名いる。

#### イ 地産地消及び食育の推進、都市住民との交流等の状況

平成12年に美佐野地区で「中鉄砲」の取り組みが始まるのと、「中鉄砲」を使った様々な試みが始まった。

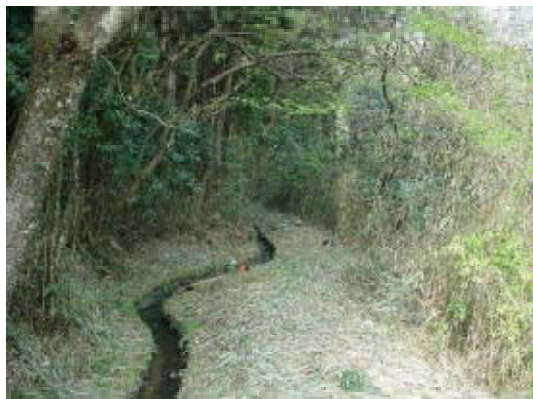
まずは、平成13年には御嵩町内の生活改善グループによる味噌加工、14年には上之郷小学校の総合学習として大豆づくり体験、15年にはには学校給食でも「みたけ味噌」が使用されるなど、大豆を通じた地産地消、食育の取組が行われている。



また、平成15年には普及センターの協力もあり、生協会員を対象とした「豆っこクラブ」が設立され、枝豆収穫やみそ作り体験を通じて都市住民との交流も深まっている。

#### ウ 地域資源（土地、水、自然環境、景観、歴史・民俗文化）の保全・活用やコミュニティ活動の強化等の状況

この地方では昔から用水路に「井」を付けて呼ぶ風習があり、水利組合の班長は「井長<sup>ゆちょう</sup>」と呼ばれている。地区では定期的に「井長」を中心に、水田の地権者全員で古い水路まで丹念に管理している。



また、美佐野地区には町の文化財にも指定されている「神明神社」があり、正月、春、秋の祭礼などの集落の行事は自治会全員参加で行っている。この地域はかつては地歌舞伎

が盛んな地域でもあり、最近では東濃地域の文化の息吹を残そうと、神明神社の廻り舞台で落語の上演を試みるなど、伝統文化を復活させようとする動きもある。



## 6 むらづくりに関する所見

当地区は、地区全体で環境に配慮した農業に取り組んでおり、特に、大豆づくりについては、ユーザー側のニーズを取り入れ、需要の確保を図った上で高値で大豆を販売するという、それまでの生産者の大豆づくりに対する意識を変えたばかりでなく、消費者からも高い評価を受け、「中鉄砲」づくりを契機とした様々な取組が生まれていることは評価できる。

また、地元企業との関係も良好であり、地区からの一定の雇用が図られているばかりでなく、退職後は再び地域農業の担い手になっている等、両者の共存共栄の関係が生まれており、豊かさを感じる。

さらに、地域の環境保全、景観管理についても地元企業と地区が協働して行っている点も評価できる。